

---

a spoonful of  
ever lasting girl

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

a spoonful of

### 【ZINE】

N7203L

### 【作者名】

ever lasting girl

【あらすじ】  
砂糖と私と彼の  
思い出話。  
超短編です。

「砂糖は太る、って君は言つけれど」と、彼は言つた。「甘いものは気持ちを優しくしてくれるんだよ。それに頭を動かせるのにも必要だ。」当時ゆっくりと増加傾向にあった体重を気にして甘い物を控えていた私に彼はそう言い聞かせ、一日一回のコーヒー・ブレイクにはいつもちょうど二スプーン一杯分の砂糖を入れてくれた。

少し理屈っぽく頑固だけれど、物腰が柔らかなせいでの間にはそれとなくうまく丸め込まれてしまう。ちらかつていてるけれどわためみみたいにふわふわにカールした髪の毛や好んで着ていた生成がかつた白いシャツが、よりいつそう柔らかい印象を与えていた。私はその少し目の粗い特殊な生地の白いシャツに顔をうずめて眠るのが好きだった。そして眠ると、何故かいつも決まってビスケットやケーキなど甘い物の夢を見た。そして目を覚ますと、彼が「コーヒーを入れてくれるのだ。

好きだ、なんて片手に数えるくらいしか言つてもうたことがなかつた。

シユガースプーン一杯分の優しさ。シユガースプーン一杯分の愛情。それ以上でもそれ以下でもない、それが彼が私にくれたものだった。

いまだもコーヒーを飲むときには時々、自分でちょうど二スプーン一杯分砂糖を入れてみたりする。

スプーン一杯分の砂糖は、私の気持ちを優しく、そつと痛くしていく  
れる。

(後書き)

まあ、フィクション。ノーフィクション。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7203l/>

---

a spoonful of

2011年1月27日01時45分発行